

C- I -25 院内における呼吸療法の実技演習の取り組み 武蔵野赤十字病院 救命救急センター

楠 さくら

【はじめに】

当院では、看護師の実践能力を高める研修を実施している。その中の呼吸理学療法の実技演習では、呼吸療法認定士（以下認定士と省略）10名が指導者となり実技演習を開催した。この取り組みが、認定士の活動を確立し、看護師の呼吸療法のレベルの向上に繋がる内容であったか、参加者のアンケート結果から検討する。

【方法】

認定士は2名のPTと8名の看護師で構成されている。常に呼吸療法に携わることがないメンバーもいたため、認定士の知識・技術の統一のために6回にわたり勉強会を開催した。実技演習では、体位排痰方法をデモンストレーションし、少人数グループに別れて実施者・患者を体験できるようにした。実技演習終了後、45名の参加者全員に対してアンケート用紙を配布した。

【結果・考察】

アンケート結果を基に3つの視点から実技演習が効果的な内容であったのかを検討した。①指導者としての認定士の取り組み：指導者という役割に対する不安の声が聞かれたため、勉強会を重ね、過度の責任感を感じさせないように援助体制を整えた。その結果、「楽しく指導ができることが出来た」という声がかかれた。認定士の知識・技術の習得の場となり、役割が明確になったことで不安の軽減となったといえる。また、

95%以上の参加者が満足した結果であったことから、実技演習の取り組みは、認定士のモチベーションを高め、参加者の認定士に対する認識を高めることができたと考える。②体験参加型の研修内容：95%以上の参加者が「患者側の立場に立てた」といった結果から、相手の立場に立つことで、今までのケアを振り返り、自分なりの呼吸療法を考える機会となったといえる。記述内容には20名の参加者が「体験する事で理解が深まった」と記述していた。今回の研修が、学習の意味を認識するきっかけとなり、継続教育として効果的であったと考えられる。しかし、進行方法については、満足している人が74%と低い値であった。意見内容から90分の1回という研修時間で伝える内容の限界を感じ、技術を習得し病棟に反映するためには、研修期間について検討する必要があるため、今後の課題となる点である。③参加者の呼吸療法に対する意識：参加者の経験年数は1年目から17年目に及び、呼吸療法に実際に携わらない病棟の参加があった。参加者の呼吸療法に対する意識の変容が起こり、自分自身の価値感として組み込まれ、個々のレベルの向上に繋がったと考える。また、9%の訪問看護師の参加の理由は、慢性呼吸器疾患患者のケアで、技術が求められているということであった。呼吸療法は、病院内に留まらず、在宅の依存度が高い患者の直接的ケアとしても必要とされていると言える。